



## 活動報告

### 飛翔性昆虫調査の試行を始めました！ ～ 日本版 Big Bug Count を目指して ～ 植田 睦之

飛翔性昆虫のモニタリングのための予備調査をはじめました。夏鳥をはじめとした鳥たちの減少の原因の1つに飛翔性昆虫の減少があるのではないかと思います、そのモニタリング体制をつくるのが目的です。

自動車に網をとりつけるトラックトラップという方法を紹介していただいたので、それをもとに会員の皆さんにも簡単に参加していただける方法として改良した、原付トラップ(写真)を考案し試しています。また、4月からもう1つの方法「自動販売機トラップ(仮称)」で調査の試行をしています。

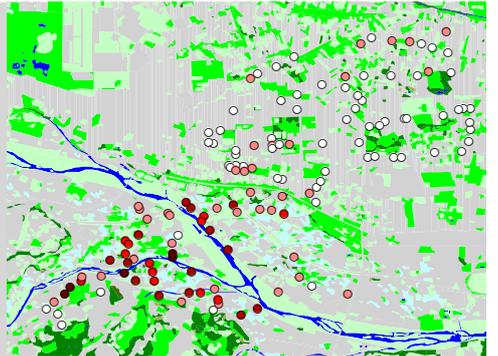
図1. 飛翔性昆虫調査用のカスタムバイク「Suzuki Let's II インセクトスペシャル」。カッコいいので、調査していると、みんな振り返ります。左側の捕虫網が原付トラップ、その下に取り付けたGPSを使って、原付トラップの調査コースと「自動販売機トラップ」の位置と結果を入力します。いずれもワンタッチで外せるので、外に停めていても盗まれることはありません。



薄暗い道にある自動販売機を夜に訪れ、集まっている虫を数えるという簡単な方法です。秋まで2つの方法でモニタリングをしてみて使えそうかどうか検討しようと思います。

4月8～15日の自動販売機トラップの調査からは川のまわりに虫が多い様子が伺えます(図)。夜、自動販売機の虫をかぞえているのは、ジュースを選んでいるようにも見えろけど微妙に怪しいらしく、調査中、パトカーが調査しているぼくのまわりを2度、横目に見ながら通過して、3度目に「何しているんですか？」と声をかけてきました。「虫を調べてるんですけど見ます？」というと「はあ」と去っていきました。

図2. 「自動販売機トラップ」の調査結果。丸がトラップ(自動販売機)の位置を示し、色の濃いものほど虫が多くいたことを示す。地図下部を西から東に流れる多摩川・浅川流域に濃い丸が集中している。



## 季節前線ウォッチ 中間報告

植田 睦之

季節前線ウォッチにご協力いただき、ありがとうございます。「鳥にはあまり興味はなかったのですが面白い企画なので参加しました。」など今まで鳥の調査に係っていなかった方にも参加していただき、この調査を立ち上げて良かったなと思っています。

広報が不十分なので情報はまだまだ少ないのですが、ウグイス、ヒバリ、ツバメの情報がある程度集まりましたので、季節前線の地図にまとめてみました。

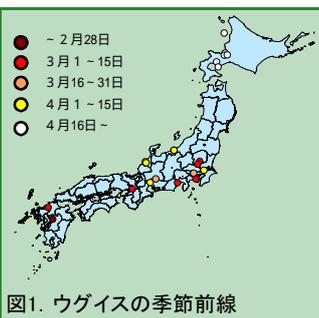


図1. ウグイスの季節前線

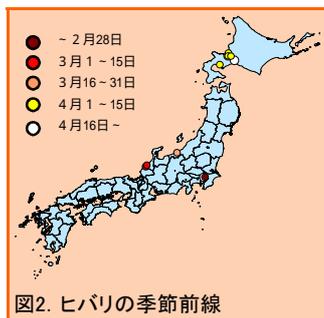


図2. ヒバリの季節前線

どの種もやはり九州の方から東へ、あるいは太平洋側から北へ季節が進んでいく傾向がありました。しかし、ツバメの日本海側だけが少し特異的で、他地域よりも早くから見られる傾向にあったのが想定外でした。

先日、山形に行く機会があったのですが、山影にはまだ雪がたくさん残っていて、東京よりも寒いにもかかわらず、ツバメはたくさんいました。

なぜ日本海側のツバメの飛来が早いのでしょうか。雪がとけると虫が一気に発生するので条件が良いのでしょうか？それともツバメの絶対数が多いので春先から目につくだけなのでしょうか？どなたか理由をご存じ、あるいは思い当たる方がいらっしゃいましたら教えて下さい。

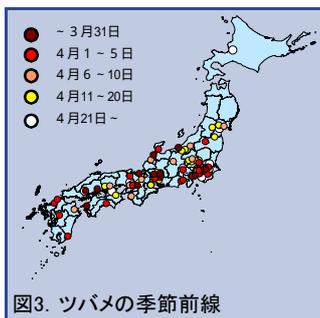


図3. ツバメの季節前線

そろそろアオバズクやカッコウがやってくる季節です。これらの鳥をみかけたらお知らせ下さい。

なお、季節前線ウォッチのツバメの調査は「ツバメ観察全国ネットワーク」と共同で実施しています。

# 活動報告

## 関東カワウモニタリング2005年3月 調査結果報告

加藤 ななえ

バードリサーチでは、年3回(7月, 12月, 3月)関東で確認されているねぐら(繁殖地を含む)のほぼ全てでカワウの個体数と営巣数を調査しています。7月と12月の調査に続いて、今回は繁殖期の最中で、巣立ちのピークが来る直前にあたる

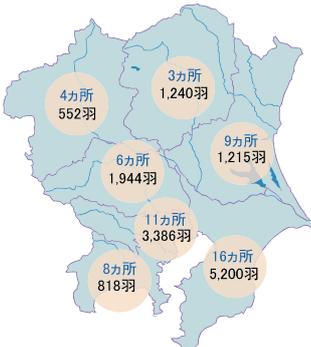


図1. 2005年3月の都県別のカワウのねぐら箇所数と個体数

ねぐらは57ヶ所確認し、全体としては前回よりも1ヶ所増加しました。新しく発見されたねぐらは、茨城県1ヶ所、栃木県1ヶ所、群馬県1ヶ所、千葉県3ヶ所、神奈川県1ヶ所の計7ヶ所でした(図1)。



図2. 関東のカワウの個体数の季節変化。2004年3月(春)以前のデータは、日本野鳥の会より提供。

減少の原因としては、まず調査地域の外への移動が考えられますが、周辺地域で3月に個体数が急増するという情報は得られていないので、移動だけで説明するのは難しいと思います。したがって、体力や採食技術の劣っている若い個体を中心に、採食条件の厳しい冬を乗り越えられずに死亡しているものが多いのではないかと推測しています。



図3. カワウの親子。繁殖期のコロニーはヒナが大騒ぎして賑やか。 [Photo by 石川 一樹]

今回調査したねぐらのうち、営巣が確認されたのは18ヶ所で、その営巣数の合計は3,459巣でした。都県別に見ると茨城県2ヶ所、栃木県1ヶ所、群馬県3ヶ所、埼玉県2ヶ所、千葉県4ヶ所、東京都4ヶ所、神奈川県2ヶ所でした。このうち初めて営巣が確認された場所が6ヶ所ありました。特に千葉県にあるダム湖では、ねぐら発見時に既に90巣を数えるコロニーになっていたことが確認されました。数年前前から繁殖していた可能性も考えられます。人による攪乱を避けながら、どんどん人の目につきにくい場所にねぐらを作り、早い段階で繁殖が始まる傾向があるようです。

確認しなければならない場所は増えるばかりで、調査をしてくださっている皆さんにはご苦労をおかけしています。100名を越える調査員の方々にご協力いただいています。カワウのねぐらを発見された方はぜひお知らせください。関東以外からの情報もお待ちしています。

表1. 2005年3月の調査で、個体数の多かったねぐら ベスト3

順位	地名	個体数
1位	千葉県行徳鳥獣保護区	2,642羽
2位	東京都水元公園	1,204羽
3位	東京都第六台場	1,000羽

表2. 2005年3月の調査で、営巣数が多かったコロニー ベスト3

順位	地名	営巣数
1位	行徳鳥獣保護区	1,231巣
2位	第六台場	468巣
3位	埼玉県荒沢沼	363巣

# レポート

## 「関東カワウ広域協議会」が動きはじめました

関東カワウ広域協議会第1回総会が4月27日に、東京の新橋で開かれました。関東各都県に福島県と山梨県、静岡県を含む1都9県の行政(鳥獣、水産、河川の担当部署)や、漁連、自然保護団体、中央省庁(環境省、水産庁、国土交通省)、カワウや魚類などの専門家、約100名が集まりました。バードリサーチはこの協議会の事務局に加わっていますので、総会の当日も裏方として運営のお手伝いをしました。

関東域のカワウを一つのまとまりとして把握し、その保護管理について協議し対応していこうという体制の始まりです。これまでは各地で、放流魚の捕食に悩む漁協などが、個々に追い払いや駆除などの対策を行なってきた

いました。しかし、都県境を越えて移動するカワウに対して、対策の方法や時期などがばらばらでは効果は望めない、という指摘がされていました。また、カワウがどこに何羽いるのかなど、基本的な情報が共有されていないという問題もありました。このような現状から、漁協の方々や都県の行政担当者などからは、「カワウ対策を広域で行って欲しい」という要望が出されていました。

私達も関係者が一堂に集まることは重要だと考えます。あらゆる関係者が情報を共有して、なにが問題で、どうすれば解決できるのか、その方法はどうすれば良いのかなど話し合っ対策を進めることが重要だからです。そして、対策の効果をモニタリングによって科学的に検証し、その結果を踏まえて共に考え、より良い対策へ切り替えていくという順応的な管理の仕組みが築かれるように、バードリサーチは今後も協力して行こうと思います。【加藤 ななえ】

論文紹介

翼にも嘴がある？  
～ジュウイチのヒナの餌請い戦略～

Keita D. Tanaka and Keisuke Ueda. 2005. *Horsfield's Hawk-Cuckoo Nestlings Simulate Multiple Gapes for Begging*. *Science* 308: 653.

バードリサーチ囑託研究員の田中啓太です。上田恵介先生と共著の拙著論文が *Science* に掲載されましたので、紹介させていただきます。托卵鳥であるジュウイチのヒナが、いかにして宿主に餌を多く運ばせているか、という話です。

カッコウを始めとする様々な托卵鳥のヒナは、孵化後すぐに宿主のヒナや卵を巣の外に落とすなどして、殺してしまいます。こうすることで托卵鳥のヒナは餌を巡って他のヒナと争ったり、宿主に自分達のヒナではないということがばれたりすることなく育つことができます (Lotem 1993)。その一方で、ヒナの数が減るとその巣全体としての餌をねだる刺激が減ることになり、宿主が運んでくる餌の量が減少してしまうという結果を招きます (Kilner *et al.* 1999; Kilner *et al.* 2004)。そのため、托卵鳥のヒナは自分の餌要求量にあわせて、何とかしてより多くの餌を宿主に運ばせる必要があるのです。

たとえばヨーロッパヨシキリに托卵するカッコウでは、餌の要求量は宿主の一腹分のヒナ (4~5 羽) と変わりませんが、ヒナが口を開けた時の面積の合計 (開口部面積) はずっと小さくなってしまいます。この開口部面積というのは親が給餌量を調節する重要な信号となっているため、開口部面積に見合った給餌量では、カッコウのヒナは巣立つことができません。そこで、もう一つ重要な餌請い信号である鳴き声を異常なまでに激しくすることで、この視覚刺激の不足分を補っているということがわかっています (Kilner *et al.* 1999)。

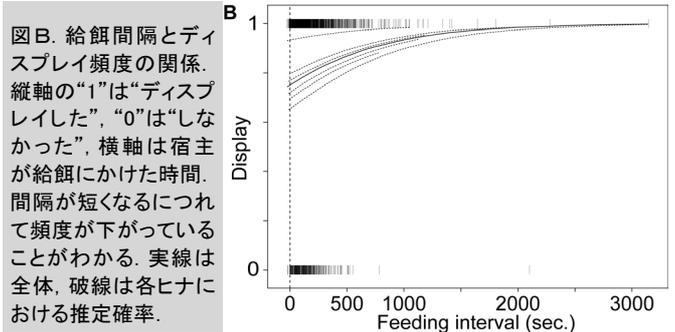
ではジュウイチの場合はどうなのでしょう？ジュウイチのヒナは、図A の写真にあるように、翼の内側に口内と同じ黄色い皮膚が裸出している部分 (翼角) を持っています。そして、宿主が給餌にやってくると翼を持ち上げ、激しく揺らすことでこの翼角を宿主に対して誇示します。このことから、翼角が餌請いの信号となっていて、ジュウイチのヒナは翼角をディスプレイをすることによって宿主を操作している、ということが考えられます。



図A. 給餌にやってきた宿主に対し、翼を持ち上げて揺らし、翼角皮膚裸出部を誇示するジュウイチのヒナ。

この形質が餌請いの信号であるならば、空腹の時のヒナはそうでない時よりも強くディスプレイをする必要があります。そこで、給餌の際に翼角をディスプレイしたかどうかということと、前回給餌を受けた時からどれくらい時間が経っているのか、つまりヒナの空腹の度合いとの関係を調べてみました。すると、給餌の間隔が短くなればなるほど、ヒナがディ

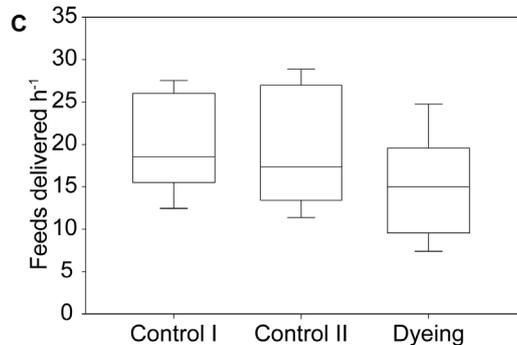
スプレイをする頻度が減少するという結果が得られました (図B,  $P < 0.0001$ )。これによりジュウイチのヒナは餌をもらおうとしてディスプレイしているということがわかりました。



図B. 給餌間隔とディスプレイ頻度の関係。縦軸の“1”は“ディスプレイした”, “0”は“しなかった”, 横軸は宿主が給餌にかけた時間。間隔が短くなるにつれて頻度が下がっていることがわかる。実線は全体、破線は各ヒナにおける推定確率。

では信号の受け手である宿主はどうなのでしょう。もし宿主がディスプレイに応じて給餌量を増やしていなければこの形質には意味がありません。このことを調べるために野外で実験を行いました。実験は、操作を行わなかった場合 (対照区I, Control I) と、人がいじった効果を見るため、無色の溶剤を塗った場合 (対照区II, Control II)、ジュウイチのヒナの翼角を黒い無害の顔料で塗り黄色を隠した場合 (処理区, Dyeing) の3通りの条件を設けて、それぞれの給餌回数を比較しました。

すると、対照区I に比べて対照区II では給餌回数は減少しませんでした ( $P = 0.27$ )、翼角を黒く塗った処理区では統計的に有意な減少が見られました ( $P = 0.0085$ )。これにより翼角は給餌を引き出す機能を持っているということがわかりました。



図C. 実験処理毎の1時間あたりの給餌回数。翼角を黒く塗った場合 (Dyeing) に、仮親による給餌回数が減少した。

この翼角が給餌を引き出している機構や、どのようにして進化してきたのかということについては、詳しいことはわかっていません。しかし、ビデオを用いて観察を行った結果、ごく稀にですが、宿主が間違えて翼角に給餌を行うことが確認されました (Tanaka *et al.* in press)。この観察から、宿主は巣の中にいるヒナの数が多いと錯覚してしまうために餌を多く運んでくる、ということが示唆されます。

また、ジュウイチの宿主は地面に営巣する鳥がほとんどなのですが、地上近くに巣を作る鳥のヒナは、哺乳類による捕食を避けるためにヒナの鳴き声が小さくなっているということが知られています (Briskie *et al.* 1999)。ジュウイチのヒナの黄色い翼角を誇示するディスプレイはカッコウのヒナのように大きな声で鳴けない条件の中で進化してきたのかも知れません。

【立教大・院・理 (学振特別研究員) / バードリサーチ囑託研究員 田中啓太】

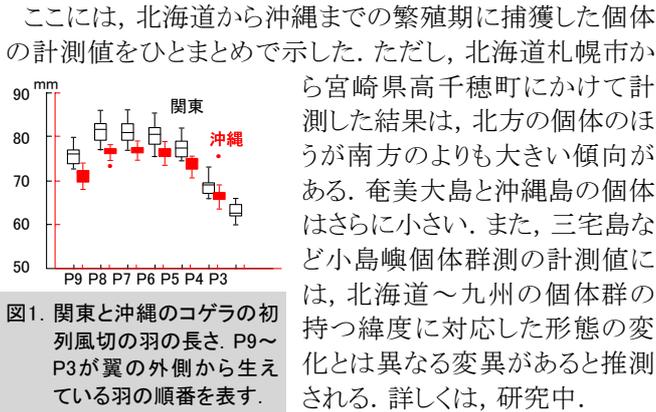
# コゲラ 英: Japanese Pygmy Woodpecker 学: *Dendrocopos kizuki*

## 1. 分類と形態

分類: キツツキ目 キツツキ科

- 全長: 約15cm
- 翼長: ♂76-88mm ♀79-91mm
- 尾長: ♂42-57mm ♀46-57mm
- 露出嘴峰長: ♂13.5-17.2mm ♀14.5-18.7mm
- ふ蹠長: ♂13.4-15.7mm ♀13.7-16.3mm
- 体重: ♂17.8-22.8g ♀19.3-26.4g

※全長は吉井(監)1988, その他は日本での著者による繁殖期の測定値



ここに、北海道から沖縄までの繁殖期に捕獲した個体の計測値をひとまとめで示した。ただし、北海道札幌市から宮崎県高千穂町にかけて計測した結果は、北方の個体のほうが南方のよりも大きい傾向がある。奄美大島と沖縄島の個体はさらに小さい。また、三宅島など小島嶼個体群測の計測値には、北海道~九州の個体群の持つ緯度に対応した形態の変化とは異なる変異があると推測される。詳しくは、研究中。

羽色: 雌雄ほぼ同色で、雄の後頭部側面には数枚の赤羽があるが、見えないこともある。背面、翼とも、やや褐色味をおびた灰色と白色の斑状模様をていする。腹面は白色部分が多く、背面と同色か褐色味の強い縦斑がある。白い眉班がくっきりとしていて、嘴は黒い。幼鳥は、尾が短く、嘴の合わせ目が黄色味を持ち、羽毛の斑がわずかにぼんやりしている。

形態と同様に、地域個体群による変異があり、北海道の個体は白色部が大きく、南へ行くほど白色部が減少し暗色に見える傾向がある。



鳴き声: ギー, ギギギ, あるいはゾーイー. キツ, キキキキキなどの声を出す。おだやかなギーは、つがいや家族などの個体間の確認の鳴きかけのような機能, 強いキッキの声は、自己主張のような状況で用いられる。

## 2. 分布と生息環境

分布: 日本列島周辺の、島嶼と朝鮮半島, 中国の東部の狭い範囲に分布する。日本列島周辺ではカラフト島の南部, 南方は沖縄島まで繁殖が確認されている。西表島にも生息情報があるが、繁殖・生息密度・個体数などは未確認。本州に近く森林のある佐渡島, 伊豆大島などには生

息していない。日本産鳥類目録(2001)では13亜種に分けられている。

生息環境: 落葉広葉樹林, 常緑広葉樹林, 亜寒帯針葉樹林, 針広混交林など, また都市緑地から自然林まで広い範囲の森林で繁殖している。

## 3. 生活史

月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

非繁殖期      繁殖期      若鳥移動

巣: 主に生きた木の枯枝に、入口の直径約3cm, 深さ15cm余りの巣穴を掘る。毎年、新しい穴を使う。巣材はほとんどなく、わずかに木くずが残っていることはある。雌雄とも掘るが、雄の方が多い。



卵: 長径 18~20.3(平均18.9)mm, 短径 12.5~15.3(平均14.5)mm, 重さ約2g, 白・無斑

抱卵・育雛期間:

1日1卵, 早朝に産卵する。主に東京都内で調べた結果では、一腹卵数は2~5卵で、3, 4卵が多く、3卵が最頻値だった。最後の産卵後に抱卵を始め、抱卵期間約14日, 巣での育雛期間20日余り, 雌雄ともに抱卵, 育雛するが、雄の頻度が多めである。

巣立ち後: 若鳥は、1ヶ月以上親鳥のもとにとどまる。翌春3月まで親鳥の縄張りにとどまっていた若鳥



も観察されているが、2~3ヶ月でいなくなる場合が多い。生後1年目から繁殖記録がある。若鳥の分散行動は不明だが、東京都の石神井公園で、巣立った木から約130m離れた木で1年目に営巣した雄の記録がある。

## 4. 食性, その他

節足動物(昆虫類, クモ類等)を多く食べ、植物の種子(ヤマウルシ・ヌルデ・ミズキの漿果等)も食べる。主に、樹木の枝や幹, 葉の表面, 樹皮の内側, 材に穿孔している昆虫類などの無脊椎動物を、つまみぐいや材に小さい穴をあけて採食する。小さいカゲをくわえていた観察例があり、捕食している可能性がある。

## 5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

### ● 等しい役割分担と緊密なつがい関係

つがいを同時に捕獲して計測した結果では、ほとんどのつがいで雌のほうが大きかった。ふ蹠長, 翼長, 体重など、多くの計測値で雌が雄よりも大きい。雄の特徴である後頭部側面の赤い羽毛は小さく、数本しかないので、野外観察

では見えない場合もある。雌雄の形態差が小さく、卵を作る雌が大きいことは、雌雄共同で比較的似た役割分担をして繁殖活動を行う特徴と関連していると考えられる。つまり、雄のつくる精子に比べて大きな生殖巣である卵をつくる雌のほうが大きいことは、生物学的には当然で、有性

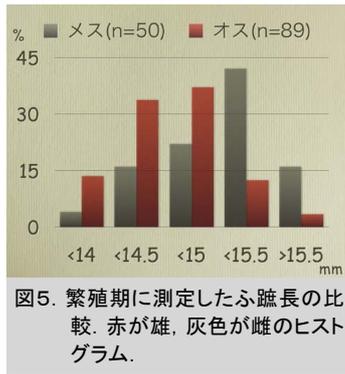


図5. 繁殖期に測定したふ蹠長の比較。赤が雄、灰色が雌のヒストグラム。

生殖する種では実際にそのような生物が多い。雄同士の体力勝負の争いなど繁殖成功に体力が効く場合に雄が大きくなるが、コゲラでは重要な性質ではないと推測される。

つがいになっているときには、ねぐら入り、巣穴掘り、抱卵、抱雛などの時間を除くほとんどの時間、雌雄が近くについて一緒に行動している。おだやかなギーギーという声を絶えず出しており、その声でコゲラを見つけることが多いし、発見しやすい鳥である。この声はつがいどうしが「ここにいるよ」と確認しあっている役割があるようだ。巣立ちした若鳥を同伴している家族群でもこの声が使われる。

東京での観察で、同じ個体どうしが3年間続けて繁殖した例が2例確認されている(多賀1988, 土橋1989)。夜明けに1羽が稍でキッキキキと強く鳴き、そのあと、1羽が一気に飛んで2羽が合流し、一緒に移動し始めたことも観られた。

私は研究のために数年間、コゲラとアカゲラの複数の個体を飼育したことがある。その多くの期間、毎日世話をするためや置き場所の都合で、自宅にコゲラの飼育ケージをおいていた。飼育個体は、私になついで寄ってくるという風ではなかったが、帰宅した時にはかならずキッキキキという声を上げるなど、人に対しても多くの反応を示し、アカゲラの飼育個体とは明らかに異なっていた。上述したようなコゲラの緊密なつがい維持という社会的行動上の特徴が、少しだけ人に対しても現れたのではないかと思う。

### ●控えめなドラミングと強い鳴き声

キツツキはみな、くちばしで木を叩いて音を出し(ドラミング)、なわばり宣言やつがい相手の呼び寄せをする。近年は電柱の金属部分を叩くこともある。コゲラもドラミングをするが、多くの場合その音はかなり控えめ(約0.4秒間に10回程度で音も小さい)で、遠くまで届かない。その代わり、キッキキキという声を張り上げ、この声は遠くまで聞こえるので、アオゲラのピョーという声と同じようにこの声でドラミングの代わりになわばり宣言などの機能を持っていると考えられる。キッキの声は、強く主張する場合の声で、雛が餌をねだるようなときにも、この声に似た声を出すことがある。

### ●どうして伊豆大島や佐渡島にいないのか？

日本列島周辺の多くの島々に生息するコゲラだが、伊豆大島や佐渡島にはいない。どちらの島にも、コゲラにとっては十分すぎるぐらいの森が残っており、ほんの30km足らずで晴ればよく見える対岸の本州の木立ではコゲラがすぐ

に見つかる。佐渡島には、体がずっと大きいオオアカゲラが棲んでいる。伊豆諸島では、本州から大島より遠い三宅島と御蔵島にコゲラが生息している。定着しなかったのか、絶滅したのか、不思議で、興味深い。

### ●都市での巣穴に適した枯枝の伐採

緑の多い公園や学校のキャンパスなどでも、通行人の安全や景観のためという名目で、コゲラの巣穴のあった枝が、次々と伐りとられてしまう。卵や雛がいる巣が伐られる場合もたまにあり、抱卵に至る前にせつかく苦勞して掘った巣穴を失う場合も少なくない。池畔にあった子育て中の営巣木が水の中に倒されて、コゲラのヒナがおぼれ死んでいるのを目撃したこともある。

山地でも、枯れ枝を丹念に調べてみると、コゲラの営巣に適した枯れ枝は意外と少なく、20haほどもあって体の割には大きいなわばりを確保しているのは、営巣に適した枯枝を確保する上で重要だと推測される。

## 6. 参考文献

- 土橋信夫. 1989. 東京都板橋区でつがい個体識別され、繁殖したコゲラ. *Strix* 8: 161-168.
- 石田健. 1997. 日本動物大百科・第4巻「鳥類」, 平凡社, 東京.
- 石田健・多賀レア. 1988. 馬事公苑(東京都内)武蔵野自然林の植生とコゲラの穴木分布. *Strix* 7: 213-230.
- 日本鳥学会. 2001. 日本産鳥類目録(第6版).
- 多賀レア. 1988. 東京都馬事公苑におけるコゲラの営巣記録. *Strix* 7: 291-295.
- 吉井正(監修). 1988. コンサイス鳥名事典. 三省堂, 東京.

## 7. 参考ホームページ

東京大学石田研究室 コゲラの研究のページ  
<http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/~ishiken/japanese/kogera/kogera.html>

## 執筆者

石田 健

東京大学大学院農学生命科学研究科  
 生態システム学専攻 助教授

コゲラがいちばん好きで研究に没頭したい鳥だが、諸般の事情から、他にも興味深い奄美大島の生態系保全と管理、ミズナラの結実特性なども研究している。ツキノワグマを捕獲して調査していたこともある。この原稿を提出したら、コゲラの捕獲・計測調査の放浪の旅に出発する。



2005年春、ノグチゲラ調査の樹上で

## 活動計画

### バードリサーチ2005年度大会

来る2005年8月6日にバードリサーチの2005年度大会を多摩平の森ふれあい館で開催します。詳しいプログラムは来月号に掲載しますが、夏真っ盛りバケーションの予定を早く立てられる方もいるだろうと思い、早めにお知らせします。この大会は、バードリサーチの会員か、活動に参加・協力している方であればどなたでも参加することができます。皆さまのご参加をお待ちしています。

開催日:2005年8月6日

場所:多摩平の森ふれあい館(中央線豊田駅徒歩5分)

プログラム:

- |             |                    |
|-------------|--------------------|
| 13:00~14:30 | バードリサーチ活動報告        |
| 15:00~16:00 | データベース講習会          |
| 16:00~17:00 | 会員の研究発表            |
| 17:00~      | エクスカージョン           |
|             | 多摩川のツバメのねぐら観察会     |
| 19:30~      | 懇親会(京王線聖蹟桜ヶ丘付近を予定) |

## 図書紹介

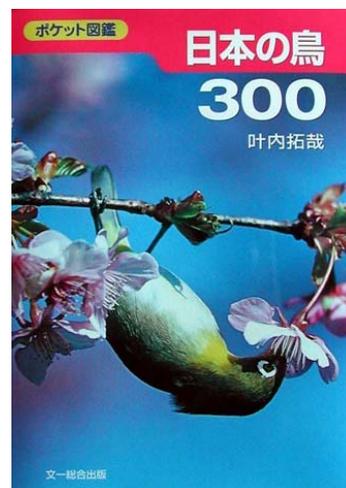
### ポケット図鑑 日本の野鳥300

叶内拓哉著/文一総合出版 定価 1,000円

文一総合出版より、「日本の野鳥300」を寄贈していただきました。ありがとうございます。

15×10.5cmのコンパクトなサイズながら、300種の鳥が写真で紹介されています。300種はベテランの人には物足りないかもしれませんが、通常の用途には十分な数でしょう。小さい図鑑ですので、メインに絵の図鑑を使っている人が、サブで写真の図鑑を考えている方に良いと思います。お値段はなんと1000円。お買い得です。

【植田睦之】



## レポート

### 奇形のくちばしでどうやって餌を採る？

行徳野鳥観察舎友の会 山口 誠

去年はトラツグミが保護されてくる事が多かったのですが、その中に1羽、事故で上の嘴が折れてほとんど無くなっている個体がありました。ずっと割餌するしかないのかなあと思っていたら、意外にも自力で採餌し、結構量も食べており元気になりました。しかしさすがに放鳥はできず、個室でオナガと同居することになりました。個室に移した後も普通に餌を食べており、現在まで無事に過ごしています。

今月のカワウバンディングの時に高木憲太郎さんと病院の鳥について話していた時にこのトラツグミが話題になり、どうやってエサを



自力で食べる方法を見つけた上嘴の折れたトラツグミ

[ Photo by 山口 誠 ]

食べているのか？と言う話になりました。パートの土屋さんは見たことがあるそうで、下の嘴ですくうようにして食べていたと言っていました。僕が見ているときには、警戒して餌に近づきません。そこで、高木さんの提案でビデオを仕掛けてみる事にしました。

その結果、やはり下嘴を使って食べていたのですが、すくうというより軽く刺して放り上げ口に入れるというとてもテクニカルな採餌をしている事がわかりました。餌は5mm角ぐらいに切ったパンや水でふやかしたドックフード・丸官鳥の餌で、この時はドックフードを食べていました。トラツグミには大きめですが一口サイズなので丁度良いようです。ただし、失敗することのほうが多く、途中で落ちたり口に入らずまわりにこぼしたりします。その場合多くはおがくずだらけになっても落ちたえさを再び刺したり、すくいあげて食べていました。(ホームページに動画があります。 [http://www.bird-research.jp/1\\_newsletter/member\\_dir/object/Bill/](http://www.bird-research.jp/1_newsletter/member_dir/object/Bill/))

本来、このようなハンデを負った鳥は自然下では死んでしまうものなのかもしれません。でも飼育下とはいえ自力で餌を取る方法を考えたこの鳥のたくましさのようなものを感じました。

バードリサーチニュース 2005年5月号 Vol.2 No.5

2005年 5月 11日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ

〒191-0032 東京都日野市三沢1-26-9 森美荘 I-102

TEL & FAX 042-594-7379

E-mail: info@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 高木憲太郎